

2021年11月28日 待降節第1主日礼拝メッセージ

「今日只今を生きる」

牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書

13章 21-37節

今日から、クリスマスを待ち望むアドベント、待降節ということで、先ほどもクランツのろうそくへの点灯がありましたし、また教会にもクリスマスツリーを飾り付けたり、降誕の場面を表した人形たちのクリブを並べたりしました。一昨日にそれらの飾りつけの作業をしていましたら、園庭で遊んでいた保育園の子どもたちがすぐに気付いて、窓からこのツリーやクリブを見ながら、「あっ、クリスマスや」「サンタさんや」という子どもたちもいました。またまさに今、来月の保育園のクリスマス会に向けて、ページェントの練習をしている年長さんたちは、クリブを眺めながら、「マリアさんとヨセフさんとイエス様や、羊飼いもおるなあ」と言っていました。

私たちは「クリスマス」と聞くと、すぐにプレゼントやご馳走を連想してしまうかもしれません。12月になると町中のあちこちでクリスマスの歌や曲が流れて、様々な飾りつけや暗い夜道を照らす鮮やかな電飾が目を惹きます。しかし、今からおおよそ2000年前に神の子イエス様がお生まれになった最初のクリスマスは、そんな鮮やかでも華やかでもなく、暗く、冷たい夜中の出来事でした。

新型コロナウイルス感染症という新たな病気が世界中に蔓延してから、2回目のクリスマスを私たちは迎えようとしています。日本では現在のところ、夏の「第5波」からは感染が下火になっていますが、世界を見回すと日々に何千人、何万人という単位で新規感染者が増え続けている国もありますし、決して楽観視は出来ない状況が続いています。さらに世界中で感染拡大のために、様々な製品の生産工場が休業や減産を余儀なくされ、海運も陸運も停滞が続いています。それらの物資の供給網の混乱から、世界のあちこちで、商品が品薄になったり、物価が上がったりしているそうです。私たちの身近なところでも、ガソリンや灯油がどんどん値上がりをしていますし、スーパーマーケットへ行っても、食糧品も随分と値上がりして来ている。それらを受けて、「今年のクリスマスには、いつものような用意をできないかもしれない」と心配する声も聞かれているようです。

確かに日本は以前から食糧品などを輸入に頼っていますから、コロナの影響で輸入が止まってしまうと、直ちに困ってしまいます。今の食糧自給率はカロリー換算で約37%とのこと（2020年度概算）。もし残り6割の輸入が止まったらどうなるのでしょうか。仮にそうなった場合には、どうやったら食べていけるかを、農林水産省がきちんと試算をしているということ、私は先日知りました。その発表によると、現在の日本で農業生産されている耕作地、田畑を全部使って、サツマイモなどのカロリーの高い作物を作れば、現在の食料自給率37%でも、皆が食べ

ていくことは可能なのだそうです。その際の献立例というのが、これです。（農林水産省「知ってる？日本の食料事情」）

いくつかの例がありますが、基本的に朝、昼、晩、ご飯とイモ。2・3日に一回うどんやみそ汁、納豆、牛乳は一週間に一回、卵は数週間に1個、お肉は月に1回か2回だけ、ようやく100グラム食べられる。そのような食生活をすれば、外国からの輸入が止まっても、皆が飢えることなく、食べていけるというのです。この農林水産省の発表を見て、皆さんはどのように感じられたでしょうか。明らかに現在の一般的な食生活とは大きく異なるものになります。

もちろん、今日の時点でも仕事を失い、収入を失い、先ほどの献立例のような食事も、住むところもないという方々もおられます。私たちは今日もこの礼拝後に、釜ヶ崎におられるホームレスの方々にお渡しするためにおにぎりを作る予定です。ですが、先ほどの農林水産省の試算のような、外国からの輸入が止まったら、お金があっても十分には食べられない、お金がない人たちは全く食べられない……、そのような状況になってしまいます。また今の日本の農業従事者の方々の平均年齢は大体70歳とのことですから、今後の農業の担い手のことも大きな問題です。コロナによって外国人技能実習生という名の外国人労働者が、入ってこられなくなったことに伴う人手不足があちこちで聞かれています。また食糧だけではなく、衣服、衣料品に関して言えば、現在の日本の国内自給率はわずか2%で、98%が輸入なのだそうです（2020年）。確かに私が今日も身に着けている服は全部外国産です。

これまであまり深く考えることなく、価格だけを見て、食べ物にしても着る物にしても購入していましたが、そのような生活スタイル自体が、グローバル経済の下、自分よりもさらに弱い人たちを叩いて、搾取することにつながっていました。そしてそれらが、コロナ禍の現在のように輸入が制約される状況になると、自分たちの首を絞めることに直結しています。このようなことを考えると、私たちは自分自身の生き方を、一人一人が見つめ直し、考え直す地点に来ています。10年前の東日本大震災と福島第一原発の核事故の際にも、そう誓ったはずでした。このままでは私たちも、この世界、地球自体が本当に滅んでしまう、そんな所にまで来ています。

「もうすぐ、この世界は終わってしまうのか……」世界各地で昔から、地震や洪水、火山の噴火や飢饉、戦争や迫害など、大きな災害や苦難が起こるたびに、人々は「この世の終わり」を感じてきました。それは日本でもそうですし、西洋でもそうです。「こんなにつらく苦しいことが起こるのは、もう世も末だ。早くあの世へ行って、楽になりたい……」そのように極端な考え方すら、生まれてきました。この世の終わりに関する思想は、この聖書の中にも記されています。聖書は「神様がこの世界

を創られた」という所から物語が始まっています。そのために「始まりがあれば当然、終わりがある」ということで、この世界の終末というものについて、紀元前のユダヤ教、ヘブライ語聖書の時代から考えられ、語り継がれていました。そしてイエス様の時代にも、そのような考え方は根強くあり、弟子たちの中にも「この世の終わり」「終末」について、強い関心を持っている者たちがいました。

今回の聖書の個所である「マルコによる福音書」13章の冒頭3節には「イエスがオリーブ山で神殿の方を向いて座っておられると、ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかに尋ねた。『おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、それがすべて実現するときには、どんな徴しるしがあるのですか』」と書かれています。この4人の弟子たちの質問に答える形で、この後13章には「終末」についてのイエス様の言葉が記されています。戦争があつたり、地震があつたり、飢饉があつたりするだろう。さらに今回の21節には「偽のメシア・救い主、人々を導く預言者・指導者が現れて、様々な奇跡や不思議な業を見せてくる。しかし、惑わされてはならない。それらは偽物である。だから、気をつけていなさい」と述べられています。

24節からはヘブライ語聖書の言葉を参照しながら、当時のユダヤ教の言い伝えが述べられています。確かに太陽が暗くなつたり、月が光らなくなつたり、星が落ちたりするというのは、日食や月食、流れ星の仕組みを知らなかった古代の人々にとっては、ありえない大変な出来事であつて、「世界の終わり」を連想させる出来事だったのだと思います。そしてその時には、人の子、新しい救い主がやってきて、新しい世界に導き入れられ、新しい世界が始まるのだと考えられていました。

しかし、これらの一連の返答に基づく、イエス様の結論は何かというと、それは「終わりの日はいつだ」「00年00月00日だ」というのではなく、32節にあるように「その日、その時は、誰も知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである」。だから「気をつけて、目を覚ましていなさい」というものでした。ただ父なる神、世界の創り主である神様だけが知っていて、天使もイエス様自身も知らない、と言われていきます。つまり、「『いつ世界が終わるのか』なんて、そんなことを考えても仕方ないでしょ」ということなのでしょう。

もし、あと1か月や2か月後に世界が終わるということが分かっていたら、多くの人たちはどうするでしょうか。絶望したり、自暴自棄になつたり、お金を使って散財したりする人もいるかもしれませんし、場合によっては犯罪に走る人もいるかもしれません。しかし、そこに本当の救いはありません。確かに、2000年前よりも科学技術も進歩した現代であっても、例えば「1999年で世界が滅亡する」という噂が立ったこともありましたし、このコロナ禍のような世界規模での災害の中で、「私こそ本当の救い主だ」「ここにこそ真理があり、ここに来なければ、救われない」

という偽預言者があちこちに現れて来ています。「あと何日後、何年後に終末が来ます」そのように断言されると、「今のままで大丈夫かな」と心配になってしまうこともあります。しかし、それらは全て嘘です。「目を覚まし、気をつけていなさい」とイエス様は何度も繰り返して言われました。

26 節にあるように、「主の日」や「終末の時」と呼ばれる「その時には、人の子が雲に乗ってくる」という言い伝えが、ヘブライ語聖書の時代からありました(ダニエル7:13)。しかし、いつまで経ってもそのようなことが起きないので、新約聖書の中には、「主の来臨(再臨)の約束は、一体どうなったのか。先祖たちが眠りについてからこのかた、天地創造の初めから何も変わらないではないか」(Ⅱペトロ3:4)という疑問の言葉も記されています。しかし、そのような批判に答える形で、「主の日は、空き巣泥棒のようで、『もう来ていた』ということになります」(Ⅱペトロ3:10・本田哲郎訳)とも、「今が終わりの時です」(Ⅰヨハネ2:18)とも記されています。日本語では「来臨」や「再臨」と難しい言葉で翻訳されている言葉(パルーシア)の元々の意味は、単純に「そばにいる」です。神様はいつか、やがて「終わりの日」に来られるのではなくて、もう既にこの世界に来ておられて、私たちのそばにおられる。なぜなら、クリスマスの夜、最も小さくされた人たちの間に、最も弱い存在として神様がお生まれになってくれたからです。

この世界を創られた神が、人間となって私たちの間にやってこられました(ヨハネ1:14)。クリスマスに生まれたイエス・キリストの姿、その言葉と振る舞いを通して、私たちは命の神を知ることができます(ヨハネ1:18)。そしてそのイエス・キリストは、十字架での死からも引き起こされて、今もなお私たちのそばにいて、私たちはそのキリストの中に、キリストと一体のものとして、日々に生かされています。

だから私たちは、「いつ世界の終わりが来る」とか「天国に入るためには、〇〇をしなければならぬ」という嘘偽りのデマに惑わされることなく、安心して「今日ただいま只今」を生きることが出来ます。もしも天国に入るためのパスポートを得るために、この世における様々な条件が必要だったら、私たちは自分の隣の人を、相手の人を、本当に大切にできるでしょうか。「この人はパスポートを持っているけど、あの人は持っていない」「この人は神様と一緒にいるけど、あの人は一緒にいない」…。そのように差別して眺めてしまうのではないのでしょうか。

「『終わりの日』『主の日』はいつ来るか」ということを私たちが心配しなくても、それはもう既に来ています。「神様は、誰のそばに一緒にいてくれるのか」ということを心配しなくても、もう既に全ての人々が神様の中に生かされています。だからこそ、その事実に気をつけて、目を覚ましてこんにちただいまいること。「今日只今」を生きることが出来るということに感謝して、私たちは今日もここから歩み出していきます。